

平成27年度第1回新名取市図書館施設整備検討委員会議事録

|              |                             |   |
|--------------|-----------------------------|---|
| 会議名          | 第1回 新名取市図書館施設整備検討委員会        |   |
| 日時           | 平成27年6月25日(木) 14時05分～15時30分 |   |
| 場所           | 名取市文化会館 小ホール                |   |
| 出席者<br>【13名】 | 委員8名                        | 天間環、佐伯幹子、板橋正春、福間澄絵、三塚玲子、長沼明子<br>下澤なおみ、大野千春  |
|              | アドバイザー                      | 岡本真   |
|              | 事務局4名                       | 生涯学習課 佐竹忠仁課長、佐々木賢一課長補佐<br>図書館 柴崎悦子館長、石川雅一主査 |
| 欠席者          | 委員2名                        | 早川光彦、志賀保史                                   |
| 傍聴者          | なし                          |   |

## 1 開 会

### ◎事務局

定刻を少し過ぎてしまいましたが、ただ今より平成27年度第1回名取市図書館施設整備検討委員会を始めます。

新図書館の進捗状況の報告ですが、本来であれば既に内装設計が始まり、検討事項をこの委員会に諮りながら進めていくつもりでした。しかし今日の時点では正式に設計業者との契約には至っておらず、一方新図書館の検討は進めなければならないという状況です。本日の岡本さんのお話が終わったら皆さんにご相談したいことがありますのでよろしくお願いします。

では、年間300館の図書館等を見ているアドバイザーの岡本さんから、最近の図書館が置かれている状況や新たにつくられた他の図書館の紹介等、様々なことを教えていただきたくて、いつもの会議形式ではなくこのような研修会形式としました。

時間は15時30分くらいまでを目処に考えています。それでは岡本さん、よろしくお願いします。

### ◎岡本アドバイザー

ご紹介いただきました岡本です。多分協議会の方は始めての方もいらっしゃるかもしれませんが。

今日は、新図書館の整備に関する事で、先ほど柴崎館長と打合せしたのですが、これから秋口ぐらいまでにかけて内装に関して決めていきます。決めていく上で一番手っ取り早くかつ王道な方法は、よその図書館を見てこれはいいなと思うものを名取に持ってくる、あるいは大変恐縮なのですが、よその図書館のいま一つに思う取り組みはなるべく取り入れないということが大切になるかと思います。

そういう意味で一番良い方法はいろいろな自治体の図書館を見に行くことですが、皆さんは普段いろいろなお仕事等がある中であちこち出歩いて見るということは大変難し

いことではないかと思います。

そこで、私の方から世の中にどんな図書館があるのか、あるいはそれぞれの図書館でどのような取り組みをしているのかといった事例をベースに紹介させていただきたいと思います。

私は図書館をつくるコンサルティングをしているので、仕事柄で図書館や図書館に類似した施設に行っています。今年は既に 200 館ぐらい見学しましたが、大体年間 300 館は見えています。

ちなみに見学した図書館の写真をご覧いただけるように公開しています。現時点で公開している施設数は 800 館ぐらいです。すごくいいなと思った図書館は 300 枚ぐらい写真を撮ってしまっていて、大体撮った枚数でその図書館に対して自分が抱いた感想が分かるのですが、普通で 100 枚、それ以下は 50~60 枚といった感じで公開していますので、よろしければいろいろと見ていただければと思います。

さて、今日は 1 時間くらいお話しまして、その後皆さんといろいろ意見交換できればと思っております。

改めて自己紹介しますと、アカデミックリソースガイドという会社をしております。それ以外にも、名取市図書館とのお付き合いは震災以来ですが、saveMLAK という図書館・博物館・美術館・公民館を支援する活動を 2011 年 3 月 12 日からしています。2011 年 4 月末だったかと思いますが、今はもう無くなってしまいましたかつての名取市図書館に状況をお伺いして、それ以来さまざまなお付き合いをさせて頂いています。

もうそろそろ 42 歳になりますが、最近佳子さまで大変話題になった東京基督大学を卒業しています。雑誌の編集者などをしていたのですが、10 年ほど Yahoo! JAPAN という会社で働いていました。現在は主に図書館をつくるという仕事をメインにしています。

最近ですと今年の 8 月にオープンする富山市の新図書館、4 月にオープンしました沖縄県恩納村文化情報センター、実質的には図書館ですが、こうした図書館に関わっています。あるいは、つい先日河北新報等でも報道されましたが、宮城県図書館の震災デジタルアーカイブを公開しましたが、そのお手伝いもしていました。それ以外ですと、震災支援をボランティアでしていた関係から福島県須賀川市の新図書館、同じ県内で気仙沼市の図書館建設の仕事をしています。

この左上にあるのは富山市の新図書館です。かなりゴージャスなつくりですね。北陸新幹線の観光客を呼び込もうという目的があるのでかなり立派な建物になっています。隈研吾という非常に有名な国際的に活躍している代表的な一人の建築家でその作品になります。

私はこのどんぐり図書館をつくる上では、東海大学の杉本先生が描いてくださったの

ですが、その杉本先生という人を探してくる、見つけてくるというのが私の仕事でした。あとはお金まわりをどうするのか、というところを当時の宮城県図書館の担当の方々といろいろ知恵を捻って、結果ユニセフになりましたが、そのように助成していただくところに仲介をさせて頂きました。

左下にあるのは沖縄県恩納村文化情報センターになります。

一番右下は、まだ着工しておらず来年の春ぐらいに着工予定となっている、須賀川市の新図書館です。

後で回覧しますが、会社で図書館関係の専門雑誌を出しています。名取市図書館にもあります。いろいろな図書館の紹介をしておりますので、こういったところも参考にいただければと思います。

さて、ちょっと皆さんに考えていただきたいのですが、名取市図書館のような自治体が設置している公共図書館、小・中・高校にある学校図書館、大学にある大学図書館、永田町にある国立国会図書館というような種類があるのですが、最も大きい規模を持っているのは公共図書館です。今日本に公共図書館が何館ぐらいあると思われるでしょうか。ちなみに日本における自治体数は大体 1,800 ぐらいです。そしてもう一つヒントを言いますと、一応全ての自治体が図書館を設置することが求められています。一応法律的には、自治体は図書館を設置することが求められているわけですが、ちょっと手を挙げていただいてよろしいでしょうか。1,000 館ぐらいだと思う人、2,000 館ぐらいだと思う人、3,000 館ぐらいだと思う人、4,000 館ぐらいだと思う人、5,000 館ぐらいだと思う人。

年間で図書館を利用している延べ人数はどれくらいいるでしょう。日本には推定人口が最大時で 1 億 3 千万人ぐらいと言われていますが、どれぐらいの人が累計で使われていると思いますか。1 億人ぐらいの人、2 億人ぐらいの人、3 億人ぐらいの人、4 億人ぐらいの人、5 億人ぐらいの人。答えを言ってしまいますと 3 億人です。

そしてもう一つ、非常に大きな数字ですが、日本の図書館で年間に貸出しされている本の冊数はどれぐらいか。7 億冊です。この 7 億冊というのは、この 2・3 年、かなり大きな傾向として表れているのですが、日本で年間に書店やアマゾン等で売られている本の点数とほぼ同数になっています。日本では新刊で購入される本は民間が多く、同時に同じぐらいの冊数が図書館で貸出しされている状況であります。

こうしたこともあって、例えば一部の出版社から図書館がいろいろ貸出しするために新刊が売れなくなるという批判も浴びています。

ちなみに図書館が貸出ししたら本が売れなくなるということはありません。

例えば、紹介した私の本で最初に刷ったものが全部売り切れて、もう一度刷っている

という状態ですが、初版で出したのがちょうど2,000部出しました。調べましたところ、1,000部が一般に購入され、残りの1,000部は全部図書館が購入されました。

つまり、今ほとんどの本は3,000部も刷りませんし、まず売れません。私が編集者をしてきた20年前ぐらいは、3,000部は一般的でした。しかし、今は2,000部や1,000部、より人文系の国文学となると800部や500部しか刷らないということがざらにあります。実態としてはかなり図書館で買われているということがあります。

さて、自治体における図書館の設置状況を確認しておきましょう。正確には1,789自治体があり、元々は3,000自治体で合併によりやや半減といった形になっております。名取の場合は独立を守っている自治体ですが、宮城県の場合も北部の方では大崎市等が合併自治体となっております。その大崎市の場合ですと小さな図書館が1館しかなくて、とても広大な砂漠の中にポツンとオアシスがある感じとなっております。

そういう状況の自治体の図書館と比較的小規模な名取市の図書館とを枳然とはしませんが一応同じとした場合、自治体が図書館を設置している比率はこのぐらいになります。1,789自治体のうち1,358自治体が図書館を設置しています。つまり約76%の自治体が図書館を設置しています。ただし、法律上厳密に言うと、自治体は図書館を設置しなくてはならないという義務があります。義務はありますが罰則はありませんので、事実上図書館を設置していないというケースがある程度あります。これは宮城県内においてもいくつか図書館を設置していない自治体があります。

ちなみに、全ての自治体で設置されているという県が4県ありまして、滋賀県、福井県、富山県、そして鳥取県となります。比較的日本海側が多いようです。

図書館の設置率を市町村別にみますと、市の場合は98%、町、村となるに従い15%ぐらいずつ落ちていきます。なぜ市の場合、図書館設置率が高いのかといいますと、宮城県の条例で決まっているはずですが、それぞれの都道府県の中において市あるいは町、村となる要件が決められています。

一般的に地方自治法の世界では都市要件というのですが、都市や市となる要件のうちの一つに「図書館や博物館を持っていること」というルールがあります。このため、町や村だったところが合併して市となる際に例えば新図書館をつくったりしているわけですね。宮城県ですと今のところそういうケースはあまり無いですが、富谷町は現在図書館が無い町で、富谷町内では図書館をつくるかどうかという議論がなされているところです。

図書館をめぐる状況はこの10年ぐらいで様々に変わってきていまして、ここにお越しの方は図書館協議会の方や、検討委員会の委員の皆様ですので、図書館については比較のご関心がおありかと思えます。ですが、名取駅前やエアリにいる人に図書館について

聞いてみても、あまり最近図書館に行っていないという人の方が残念ながら多数なのではないかと思われます。

特に私ぐらいの世代、40代前後の世代の場合、日常生活の中でなかなか図書館に行くということは無いですね、そういう人たちが図書館についてどのようにイメージしているかといいますと、自分が子どものころに通った古くさいところという印象を結構一般に持っています。

しかし、実際にこの10年程、日本の図書館はかなり変わってきてまして、その一つのきっかけになったのが、2003年に出版された菅谷明子さんというジャーナリストが書いた「未来をつくる図書館」という本です。

この本は、アメリカの図書館がその時点においてどのように変わってきているのか、新しいサービスを取り入れているのか、かなり積極的に紹介されました。特にこの本の中で明確に訴えた内容は、図書館は単に本を貸し出す場だけではなく、例えば失業して仕事が無い人に仕事を探す手伝いをします。あるいは何かを発明しようとしている人に積極的にアドバイスします。あとはアメリカの場合非常に典型的なケースなのですが、移民の子に対して積極的な英語教育を行っています。

いわゆる図書館は社会教育施設と言われますが、本当に社会教育の担い手である図書館の姿を描き出していますね。

その結果、2005年あるいは2006年に文部科学省が、今までの貸出しを中心としたサービスの図書館から、人々の市民の課題を解決するようなお手伝いをしていること、あるいは地域において情報の拠点になる図書館、という新しい図書館像を打ち出しました。

近年そういう流れの中で記憶に新しいところでは、宮城県内では多賀城市が同じ取り組みをし、報道もかなりされましたが、佐賀県の武雄市という自治体がTSUTAYAを展開しているCCCカルチャ・コンビニエンス・クラブと組んで図書館をリニューアルしました。

武雄市は市と言っていますが、限りなく人口流出し続けていて10年後には終わってしまうだろうと思うようなひなびた閑村といったまちです。そこにおしゃれな図書館をリニューアルしてスターバックスコーヒーを入れたら、たくさん人が来るようになったというケースであり、図書館は実はまちづくりの起爆剤となり得るということで注目されてきました。ただし、後でいくつか事例を紹介しますが、武雄市の図書館はまちづくりの成功事例としていきなり登場したわけではないです。それ以外にも実はまちづくりの中核に図書館を置くという政策は、日本の各地で行われ、成功しているところはかなり成功しています。

そして、2014年猪谷千香さんというジャーナリストの方が「つながる図書館」という本を書いて、菅谷さんの本「未来をつくる図書館」が出てから10年間で日本の図書館は

どのように変わってきたかということ、非常に的確にレポートされています。この本は非常に良い本なのでぜひお読みいただければと思います。

図書館にとって大きな変化としていくつかあるのですが、一つは利用者を広く開拓しようという流れがあったということがあります。これは良くない言い方なのですが、その当時の図書館を指しての言い方の一つとしてですが、かつての図書館はどちらかというと、女・子どもの図書館であると言われていました。つまり、子どもを持って子育て中のお母さんあたりがメインの利用者であるという図書館という形がある時代までは一般的でした。

私は1973年生まれですが、私の世代ぐらいが最も日本で図書館がたくさん整備された時代です。つまり、ものすごい勢いで第一次ベビーブーム世代が子どもを産み出し、その子どもたちのゆりかごとして図書館がたくさん整備された時代であります。それは住民運動が華やかだった1980年代あたりですね。

その後バブル経済の崩壊、失われた数十年を経ながらそういう流れは止まるのですが、この時代に整備された図書館の多くは、子どものための読書、おはなし会、読み聞かせ会のようなことができる施設で、子どもに対してやさしい図書館になっているのですね。

ちなみにそれはごく最近の話で、大体30～40年遡りません。それより前、1950年代、1960年代、1970年代初頭ぐらいの図書館では、子どものための図書館という発想はほとんどありませんでした。それが増える子どもに適應するためにサービスを拡大していった結果、それはそれで良かったのですが、一方で振り返ってみると、それ以外の人は利用しない図書館になってしまったということです。

特に課題になってきたことが、主たる納税者があまり使っていないということですね。つまり20代、30代、40代のような現役の実働世代が図書館をほとんど使っていない。最大の納税者が使っていない施設を造り続ける、あるいは維持し続けるということに対して市民の理解が得られなくなってきたということですね。実際この数年非常に顕著なケースが、新しく図書館をつくるに際して、かなり強い反対運動が起きる自治体というのが少なくない状況となってきました。

かつて1980年代ぐらいまでは、図書館建設に関して反対運動が起きるといのはちょっと考えられない状態でありました。

ところが時代がそういうのを許さなくなってきて、図書館どうせ使っていないし使っていないところに税金を投入するのはいいとは思えない、という人たちが増えてきました。

実際に岐阜県の中津川市というまちでは、図書館建設をめぐるついに市長がリコールされるという事態が発生し、リコール後の出直し選挙で前職市長が落選する、その結果着工していた工事が停止になってしまったという、図書館史として初めての事件が起

きました。

こういうことを受けて、あるいはそういう事態を先取りして、図書館側としては幅広い利用者を獲得しなくてはと考えるようになったのです。

その結果行ってきたのが、いよいよ大人の世代、働いているビジネスパーソンも使えるような図書館にしていこうとなってきました。これは決して子どもの利用を排除しようとしているわけではありません。つまり、市民のあらゆる世代が、自分のスタイルで使えるようにしていかななくてはいけないと考えるようになってきたということです。

そういう流れと合わせて図書館が注目されるようになったのが、図書館の持つ集客力です。

例えば名取の場合は、イオンモールがとても大きくて私の衝撃といたらなかったですね。世の中にこんなに大きいイオンがあるのか、普通よその関東でも見ないですね。名取のイオンは端から端まで歩いて10分以上かかりますから。

私もよく覚えているのですが、どんぐり図書室の本棚を組み立てるのにどうしてもカッターが必要になり、仕方がないので私は歩いてイオンまで行きました。そこからが長かったですね。カッターを売っている文房具屋が一番閑上寄り、ひたすら歩いて、結局カッターを10個買ってくるのに30分ぐらいかかりました。

ものすごい広さなのですが、イオンは典型的な集客施設です。名取の場合は今のところあまりそういう現象はありませんが、一方でイオンのようなビジネスモデルが成立しなくなった自治体が出てきています。

一般に大型の商業・集客施設は人口が3万人を切ると機能しなくなります。つまり、大きい箱を造って、そこにたくさんいろいろなお店を入れて、事実上そこが街のようになって、たくさんの人が来てそのうち一定の人が必ずお金をおとしていくことで成立するのですが、人口3万人切るとそれが難しくなります。そして実は人口3万人を切っている都市は日本中でかなりあります。

昨年発表されて新聞報道等でごらんになった方もいるかと思いますが、消滅都市という言葉が出ました。このままですと人口減少が凄まじくその自治体がいずれ機能しなくなるのではないかというものです。

これは震災以前から東北の場合、沿岸部自治体はかなり危険だと言われていました。例えば、多賀城市は震災前にすでに次の夕張市であると完全に目されていました。それだけ財政指数が危うい、いつ破綻してもおかしくないという状態でした。その一つの理由が人口減少でした。人口が減っていくとさらに悪いのは、いわゆる地方交付税交付金という国から自治体に分配される税金の取り分が減るわけです。人口比に応じて配分される計算式があるのでそうなるわけです。

そういうわけで大型商業施設はあまりうまくいかないとなってきたところで注目されたのが公共図書館です。

公共施設の中で図書館というのは、体育館のようなスポーツ施設に次いで利用率が高いのです。これは自治体にもよりますが、よほどの大都市でなければ2割から3割、多いところだと4割ぐらいの市民が使っています。これは町レベルになりますとこの数字はもっと高くなったりします。なぜかと言うと、図書館は無料であるという非常に大きな理由があるからです。

あともう一つ、図書館の持つ集客機能が強いのは本を借りたら必ず返しに来ます。

一般にほとんどの公共図書館の貸出し期間は2週間に設定しています。2週間に設定していることから、大概の人は2週間以内に本を返しに来ますので、月に2回図書館に来ることになります。つまり、繰り返し訪れる施設になっているというわけですね。

そうすると図書館の持つ集客機能というのは侮れないということを10年くらい前から考えられるようになり、その結果、先ほど申しましたように、図書館をまちづくりの中心に据えようという考えが出てくるようになりました。

そして3点目、さらにその際に図書館を単独で考えるのではなくて、名取市の新図書館もそうですが、他の施設の機能と複合させて建物を建てる、という考えが出てきました。例えば名取の新図書館の場合も、名取駅があり、公民館があり、そして住宅も設定されるという形です。これを複合施設というのですが、複合型で建てられる図書館というのが増えてきています。

近くの例としては仙台市民図書館が入っている「せんだいメディアテーク」は典型的な例でしょう。他は塩竈市の図書館は市民センター的な建物とセットになっています。今度新たにつくります気仙沼の図書館は児童館とセットになっております。実際私は大体常時10館ぐらい、そういう施設づくりに関わっているのですが、基本的には単独施設というのは見たことがありません。必ず複合施設で整備されるようになっています。

この後の個別の事例をお話する前に遠目で分かりづらいかもしれませんが、ちょっと数字をいくつか見てみたいと思います。

これからご紹介する図書館と名取市の図書館との比較ですが、施設名があつて人口があつて職員数があつて蔵書冊数があつて住民一人あたりの貸出し冊数というのを数字にしています。これは「日本の図書館 統計と名簿」という本があり、そこに載っているデータを引っ張ってきたわけです。

名取市の場合人口約7万人です。それに対して熊本は72万人というように比較しています。この中ですごく重要な数字の一つが、住民一人あたりの貸出し冊数です。住民数でもってその図書館が年間に貸出し点数を割る、そうすると一人当たりが年間何点借り



ているかという数字で出ます。ちなみに名取市の場合は、現在仮設図書館なので相当ハンデがあると見ていただきたいのですが2.26冊で、震災前は3.98冊です。

これからご紹介する図書館は、基本的にかなりハイレベルなサービスを展開している図書館です。ハイレベルなところになりますと、住民一人当たり、例えば下から4つ目の田原市立中央図書館、ここは愛知県渥美半島にある田原市という町、トヨタの工場があるまちの一つですが、人口規模も名取とかなり近いですね。蔵書冊数は名取よりも多い。ここは3つ図書館があり全部合わせての貸出冊数が12.4冊、つまり市民が月1冊、図書館から本を借りているというぐらいの計算になります。これは平均値ですので全く借りてない人もいますたくさん使っている人もいるということこととでね。おそらくこのぐらいの数字が出るということは、市民の中には年間100点以上図書館で本を借りている人がいると思われまます。

この数字を流しながら見ていただきたいのですが、後ほどそれぞれの図書館がどんなことを実際にやっているかというのをご紹介しておきたいと思ひます。

まず1点目が、熊本市の図書館ですね。森都心とありますが、これは東京でビル開発をしている森ビルという大変大きな会社がありますが、その森ビルが建設した図書館なので森都心という名前が付けられたわけです。ここは、熊本駅前に2011年10月にオープンしました。これは元々九州新幹線の開通に伴う駅前再開発の核として、図書館がつけられました。

名取市から熊本市に行ったことがある方はほとんどいらっしやらないと思ひますけれど、この熊本駅前というのものはものすごく閑散とした場所ですね。仙台駅の場合はあまりそういう現象は見られませんが、一般的に地方都市においてJR、旧国鉄のターミナル駅と繁華街は普通離れています。

だからこの辺の規模では例外ですね。盛岡にしても、福島は明治になって人工的につけられたまちなので様相がまた違ひますけれど、東日本の太平洋側はそういう現象は見られませんが、西日本に行きますと、駅前と繁華街が離れています。これはいろいろな理由があるんですね。例えば繁華街の場所は特に四国から九州へ行きますと、大きい城があつてその石垣が邪魔をして鉄道を通せない。その結果郊外にずれていたり、これは地域によって差があるのですが、鉄道が敷かれた時に鉄道があまり町中に近いのを好まないというような反対運動が起きたり、それぞれ自治体によっていろいろなケースがあるのですが、大体繁華街と鉄道駅は離れています。

ここはかなり顕著で、熊本駅から繁華街まで2~3kmあります。路面電車が走っているまちなのですが、それを使って大体熊本駅前から繁華街へ行くのに15分くらいかかります。こちらで言うと仙台駅から東北大学まで行くぐらいの感覚があります。

駅前はとにかく閑散としており、私の妻が熊本出身なので20年くらい前から毎年行っ

ていますが、本当に最初何も無かったですね。しかし、新幹線が開通するようになると良いことがある反面、困ることもたくさん出てきます。仙台市含め宮城県は全体的に勝ち組だと思いますが、ただ一方で、古川駅周辺は明確にその負の面が出ています。便利になるとかえって人口が流出するんですね。こういうことを都市計画の考えでストロー現象というのですが、人口が吸い上げられてしまうんですね。

熊本の場合は、新幹線が通ることによって大変危機感を覚え、便利になる反面、福岡と近くなりすぎる、あるいは鹿児島が近くなりすぎることによって、熊本も相当な大都市ではありますけれども福岡には敵わない。便利になるとどんどん若者が福岡に流出してしまのではないかと、という懸念を示していました。

そのとき熊本市では、ある意味逆手に取って考えたんですね。基本的に九州の方は地元愛、地元志向が異常に強いです。そもそもそれぞれの県によって言葉や文化がかなり違います。多分基本的には地元に住みたいという気持ちが強いです。しかし会社が福岡にあるので博多に住んでいる、という熊本の出身者には少なからずいると思います。であれば、熊本駅前を再開発して再生すれば熊本から博多まで新幹線で 30 分で着きますので、むしろ駅前を人が住めるようにして博多から引き払って来てもらい、熊本駅前に住み博多に通勤してもらうようにすればよいのではということを考えますね。

そして再開発事業は始まりました。その再開発の際に、目玉になったのはやはり図書館です。後ろにあるのはマンションです。ここにとにかく住民を住ませる。ただ建てただけでは人は住んでくれないものです。そこに地域・コミュニティの機能が必要になります。

それでその結果、手前側の建物が森都新プラザ図書館ですが、1階にショッピングセンター、2階に観光情報センターを入れ熊本駅とテラスでつながっていますから、名取市の計画にある名取駅と図書館をつなぐイメージのようになります。3・4階が図書館で、その4階にビジネス支援センターという企業等のお手伝いするところがあって、5・6階が駅のホールや会議室となります。

こうすることによって、駅から帰ってくる時に図書館をちょっと使っていく、あるいは出勤する前に図書館を使う、あるいは熊本に通学してきている学生達が電車に乗る前に使うというような流れを創りだしました。

ここがすごいのは数字の面ですね。オープンして3年ほど経ちましたけれど、一貫して年間の利用者を100万人獲得しています。

武雄市の図書館も話題になりましたけれど、年間100万人というのは、最近比較的大規模な都市における図書館整備の一つの目安です。仙台市民図書館でも年間100万人も来ていないと思います。おそらく50万人ぐらいというのがいいところだと思いますが、地方都市でも実はこれぐらい人が集まるということですね。

それを生み出したのがとにかく様々なイベントをするということです。本に関わるようなイベントをとにかくたくさん行う、例えば最近普及してきているビブリオバトルという 5 分間で何かのテーマに基づいた本を紹介・書評しあって、どの本が一番読みたくなるかというのを積極的に行う。あるいは熊本は水が大変豊富な県で、ちなみに熊本は今でも水道水は地下水水脈から取っているのです、その結果ビール工場がたくさんあります。そのビール工場の工場長さんをお呼びして、特に公表されていませんが、図書館の中でみんなでビールやお酒を飲みながら本について語るというようなイベントを頻繁に行っています。その結果、行き来する・通行する人たちがちょっと寄っていく場所になり利用者 100 万人という数字につながったわけです。

次は長野県の小布施町の図書館ですね。2009 年に開館しました。小布施というまちは長野県のかなり北の方で新潟寄りになりますが、元々独自のまちづくりでかなり知られた自治体です。秋には 100 万人ぐらいこの町に観光客が訪れます。

図書館業界においては、ライブラリー・オブ・ザ・イヤーという非常にユニークなサービス、ナンバーワンというよりオンリーワンのサービスを行っている図書館を表彰するという賞があるのですが、その賞を 2011 年にこの図書館は獲得しています。

これは最近比較的町立といっている図書館には流行っている建築の仕方なのですが、基本的に仕切りを一切設けない、巨大ながらんだ空間をつかって、その中に本棚を置く、そして天井を比較的高めにして、必ず地元の木材を使うというのがかなり流行っているわけです。

こういう施設をつかって、小布施の場合はこの中で本を貸し借りするだけでなく、小さなまちですので、例えば議員さんが自分の政策説明会や政策報告会を行い、図書館も半分公民館やホールのような形で使うというようなやり方をしています。

すぐ向かいには役所や駅があるのですが、一応この図書館は単独施設で、駅の近くにあって長野市から電車で 30 分ぐらいで出られます。例えば長野市に通学している子どもが帰ってきたらこの図書館で親が迎えに来るまで待つ、というような待合室的な機能を提供して、全体的には駅や役所などと連動して使われています。

次は伊那市の図書館ですね。同じ長野県です。伊那市というのは先ほどの小布施とはまた変わって長野の一番南の方になります。ここは本当に相当な山間部です。宮城の山間部ともまた違って、南アルプスがあり本当に昔からよく人が住んでいたものだと思うような山奥です。ここもライブラリー・オブ・ザ・イヤーを 2013 年に受賞しています。

昔からあった図書館なのですが、2007 年に館長を公募してから変わってきました。どのように変わってきたかということ、やはり貸し借りするだけの図書館ではなく、図書館を学びの場にしようというように変わってきました。

この伊那というのは、伊那谷という田舎があります。東京 23 区が入るくらい広大な谷間なんですね。それで独特の文化が育まれてきています。例えば真っ先に挙がるのは昆虫食です。長野県には昆虫を食べるという文化が非常に根強く残っています。だから伊那に行くと昆虫が食卓に出されるという地域です。

それ以外にも様々な文化的特性があります。例えば図書館 1 階には伊那谷の地図、空撮写真の地図があって、そこで大人も子どももこの地域の自然環境、文化環境、歴史について学べるようなコーナーがつけられています。それでただコーナーがあるだけではなく、実際に図書館が主導して市民といっしょにまち歩きをする、歴史探索のツアーを行う、というようなことを積極的に行っています。つまり単に貸し借りしているだけではなく、図書館が社会教育、学びのためのプログラムを実践しているわけです。

次は福井県鯖江市です。ここは、2014 年にライブラリー・オブ・ザ・イヤーを受賞しているのですが、「文化の館」という複合施設となっています。

この図書館もいろいろなことをやっているのですが、一つ特色があるのは、鯖江というのはメガネフレーム産業において国内有数の都市です。

皆さんがお使いになっているメガネのフレームはまず間違いなく鯖江でつくられています。日本国内におけるメガネフレームの市場の約 9 割が鯖江でつくられています。世界市場でみると 2~3 割が鯖江市となっています。

つまり鯖江の場合は顕著に二次産業に関していうと、ほぼメガネです。ちなみに農業もあるので一次産業も比較的盛んですし、二次産業でいうともう一つ越前漆器といわれる漆工芸ですね。鯖江市が主たる生産地になります。ただ正直いって、市の法人税収の中でいうと眼鏡事業者の納めている税金がこのまちを動かしている部分があるといっても差し支えはありません。

なので図書館は眼鏡事業者の方々のために眼鏡に関する本や雑誌を非常に大量に買いそろえています。眼鏡に関する本や雑誌がこの図書館よりある図書館は多分無いと思われます。どうしてそういうことをするかといいますと、このまちの場合、眼鏡の事業者の一部を除き結構小さな工場が束ねられて最終的に鯖江ブランドのものをつくっているのですが、基本的にはそれぞれかなり小さな産業の集積帯です。

一方でメガネというのは日々進化しているわけですね。例えばファッションとしての一面があったりする中で、メガネ事業者は常に研究しなければいけないのです。新しい素材や新しいデザインについて研究しなければならないのですが、研究する上で必要になるのは本だったり雑誌だったりするのです。

しかし先ほど申し上げましたように、中小の事業者ばかりなので本や雑誌をいちいち買うお金はないのです。なので、図書館が税金で町の基幹産業の人たちにとって役に立つ本を大量に買うのです。それでここにメガネ産業の人たちが来て、図書館の本を借り

ていく、あるいは読み込んでいって自分たちの製品をより良くすることに役立てるわけです。

これは一見すると特定の産業への肩入れのように見えますが、これまで問題なくきているのは、この産業がこのまちにとって基幹産業だからですね。メガネ産業が終わってしまうと、鯖江というまちは成り立たないからです。

そういうことがあって、一般に図書館用語でビジネス支援、あるいは産業支援というのですが、その地域における重要な産業に対して適切な情報を提供していく、情報の側面から産業を支援するというようなお手伝いをしています。

あともう一つ、ここには図書館友の会という図書館のサポーター組織を市民が形成しています。鯖江の場合、人口7万人に対して友の会に入っているのは300人ぐらいです。組織率はかなり高い方ですね。300人中市役所の職員は100人で、市長も入っています。この友の会と図書館で共有して毎月ライブラリーカフェというイベントをやっています。

鯖江図書館にはカフェコーナーがあるのですが、図書館閉館後にスタートして夜間に対談して、月1回福井県内の様々な著名人、文化人や財界人、大学の先生あるいは企業の社長といった人を呼んできて、みんなでコーヒーやお茶を飲みながら、その人を囲んでワイワイガヤガヤと座談会をするというものです。

これは従来の図書館とはやはり変わってきていますね。図書館がちょっとした文化講演会の場になっていて、さらに鯖江の場合すごいのは、その時の記録が必ず毎月会報・ニューズレターに載り、50回、100回、150回と節目の度に冊子として刊行されるんですね。

つまりこのまちで生み出されたそういう座談会の記録とか、知識や情報がきちんと本になって流通し、それがいろいろな人が手に取って読むようになっているんです。

ちなみに鯖江の場合、前館長にお話を伺った際、多少誇張もあろうとは思いますがとても印象的でした。

「最近福井県内では財界人や大学の先生の間で、鯖江のライブラリーカフェに呼ばれて初めて一人前の福井人だということです。つまり、鯖江商工会議所で講演するよりも、福井大学に呼ばれて市民向けの公開講座の話をするよりも、ここに呼ばれたら初めて福井の人間として誇っていいと言ってくれている人もいますよ。」

鯖江市というのはかなり小さなまちです。置かれている環境は極めて名取市に近いです。鯖江市のすぐ北隣が巨大な福井市です。巨大な仙台市に対してくっ付いている名取市とよく似ています。

鯖江市は大規模自治体の横で独立の形を守っていながら、実は文化的には鯖江市が中心になっているという構図がつくられているということです。

あとは全然関係ない話ですが、この図書館カフェで出しているおそばが非常に美味しいですね。私は行けば必ず味見してくるのですが、福井県では福井そばというのがもの

すごく有名で、大根おろしをかけて食べるおそばなのですが、福井県内のどこで食べるおそばよりもここのおそばが一番うまいです。鯖江に行くことがあればぜひこの図書館に行ってそばを食べてほしいです。なんと言っても福井県のそば打ち名人コンテストで優勝した人が友の会の会員で、その方がいつもそばを打っているのです。そこらの有名店で食べるよりも絶対こちらの方がおいしいです。それで私が最近方々でこれを言い過ぎてこの前行ったら、「最近そばは予約しないと食べられませんよ」と言われて衝撃だったのですが、本当にそれぐらいおいしいですね。

さてこちらは滋賀県東近江市です。滋賀県というのは日本の中で見ると図書館のレベルがかなり高いところにあります。これは戦後、日本の図書館を盛り立てていく中で大きな功績があったであろう前川恒雄氏を滋賀県の県立図書館の館長にお迎えしまして、その方の指導もあったことが大きいと言えます。

先ほど言いました、住民一人当たりの貸出冊数で言うと10冊に近い数字となっています。

例えば図書館にギャラリーがあって、そこで市民が自分の作品の発表・展示をするというのはごく普通に行われています。あるいは、町の行政に関する様々な資料が置かれていて、東近江市役所の職員が自分の仕事に関して図書館に来て調べものをする、そしてそれに基づいて行政の仕事を進めていくというのはここではごくごく当たり前のことです。ちなみに、役所の人は基本的にあまり図書館を使わないというのは普通です。

役所の仕事はほとんど調べものから始まりますので、本当は役所の職員はもっと図書館を使った方が賢いのですがなかなか実際にはそうならないです。

でも東近江市の職員にそういう話をすると、「よその話では行政職員は図書館を使わないというのは本当ですか。全く理解できない話なんですけれど」と返されるぐらい、ごく普通に使われています。

東近江市あたりはかなり特殊と言えれば特殊なはずなんですよ。中世以来、荘園の歴史が脈々と残っているところなので、他の自治体と雰囲気はかなり違います。

例えばこの地域で私が大変感動したのは、公民館が無いんですね。その代わりに集議所という施設がかつての村々に必ずあって、これはつまり住民自治が基本で何かがあったらそこにみんなで寄り集まって議論を交わす、そして最後は酒を飲む、といったものが脈々と続いている地域もあり、図書館は住民自治が活性化するよう様々な事業展開をしてきました。

そしてこれが先ほど住民一人当たりの貸出冊数が驚異的に多いということで紹介しました田原市の図書館です。

ここは全般的にいい図書館なのですが、非常に顕著なのが利用者の方が協働して図書

館を運営しているということです。

特に素晴らしいのが、図書館が一定期間経つとある程度の割合で本を捨てます。これは一見するともったいないと思うかもしれませんが、本を取り置いて持ち続けるにも実はお金がかかるんですね。そのスペースに対してお金がかかるわけです。さすがに納入後 30 年経過したものについて県図書館では棄てます。

図書館に行った際にチェックしていただければと思いますが、本棚に本が普通に並んでいて、その上に本が寝かせて置いてある図書館は基本的にアウトです。それは全体の収蔵量に対して所蔵している本の割合がコントロールできていないということなので、基本的に図書館がもはや機能していない典型的なケースです。

では、実際にそうやって図書館が機能するためには、本の入れ替えが行われている必要があります。それで棄てる本が出てくるわけですが、田原市の場合、これを市民が行っている NPO に払い下げます。払い下げた後その NPO が図書館施設内でリサイクル・ブック・オフィスというものを開設して、その本を古本として販売します。販売して上がった収益、年間何十万かになるらしいですが、これを図書館に寄付するようにしています。ちなみに公共施設や行政機関は直接的に現金を受け取ることは基本的にできませんので、「図書館にこの本を買ってください」とリストを提示すると、市民団体側がその本を買い付けてその本を寄付する、というモデルができあがっています。

なかなかここまでできている図書館というのは実は無いですね。つまり、市民がそこまでやるぐらいこの地域の図書館というのは愛されていると言えるでしょう。

これは比較的近隣なのでぜひ行って頂きたいと思っていますが、岩手県の紫波町です。紫波町もかなり名取市のケースに近いです。ここは町ですが、北隣が盛岡市ですね。今盛岡のベッドタウンとして急速に繁栄しつつある、というところですよ。

ここにオガールプラザという施設を整備して、この中に図書館が入っています。駅前の駅西口、元々ですね、買ったはいいいけれど開発の目処がつかなくて、十何年以上塩漬けになっていた土地を、町すなわち行政と地元の民間企業が協力して再開発しました。

その中に図書館や市民スタジオ、音楽スタジオ、キッチンスタジオ、子育て応援センター、マルシェと言われる地産地消の食材を取り扱っているお店、昨年オープンしましたビジネスホテル、そして唯一日本で国際規格の最もしっかりとしたバレーボール施設を造りました。

この結果ですね、この地域は人口を増やしてきているわけですね。ちなみに駅があって、駅からほんの 5 分位歩くとこの施設がありますが、駅とこの施設の間に住宅が建てられています。その住宅は町が造って分譲しているわけです。そうやって住民定住を進めており、これはまちづくりとしてかなり成功をしつつあると言っていいでしょう。

と同時に、この町は基本的に農業が中心となっています。最近ですと紫波ワインが売

れています。そういう農業に対する情報提供を積極的にしています。

あるいはマルシェ、地産地消の市場と提携として、マルシェで置いている商品、野菜なら野菜、それに合ったレシピが載っている本はこれですよ、というように紹介するといった取り組みをして、施設全体が複合的に使えるように工夫されています。

これは島根県の海士町の図書館です。隠岐諸島の一つ、小さな島にあります。

先ほどの紫波町と並んで、いわゆる地方創生の中で大変注目されている町です。

何が注目されているかという、この時代に人口がとにかく増えているという事象があります。現在この島の住民は2,400人ですが、10年ちょっと前までは2,000人まで落ち込んでいました。

ちなみに隠岐諸島は太平洋戦争の被害を全くと言っていいほど受けていませんので、実は戦後とても人が多かったのです。この島でもかつては6,000人住んでいたそうです。それが約5~60年の間に急速に人口が減って半減どころじゃないですね。6,000人から2,000人です。そのすごい勢いで変化してきたわけです。

それで2,000人切りそうになった時点で、この島としてさすがにまずいということになって、いろいろな産業改革をしました。その結果この5~6年でIターンする人、Uターンする人が急速に増えてきています。2,400人中400人が移住したわけですね。

この人たちの声に基づいて図書館が5年ほど前に設立されました。ここは今年のライブラリー・オブ・ザ・イヤーを受賞しています。

ここは、やはり図書館というものがあることの意味を感じさせるのですが、移住してくるのは若者の方が多いです。私より若いぐらいの人たちの方が多いです。彼ら、彼女らの多くは基本的に都会っ子です。この島は離島ですので基本的に何もありません。まずコンビニがありません。私とかはコンビニ大好き人間ですので、コンビニが無い暮らしは絶対に有り得ないのですか。こういう島に移住する人たちはコンビニが無いことは受け入れよう、喫茶店が無いのもいい、映画館が無い、パチンコ店が無い、それらは無くてもいいのだけれど、図書館が無いということだけは許し難い。なぜならば、みんな都会に住んできていて図書館というものが当たり前子どもころから存在しているわけです。図書館が無いような町というのはさすがに受け入れ難いと若い人たち、特に移住者が強く声を上げたことによって図書館が設置されました。

元々この島には図書館はありませんでした。図書館が無い地域で図書館をつくるというのは大変難しいですが、今まで無くて困っていないじゃないかという旧住民は必ずいるんですね。この論理、理屈というのは最強で、今まで困っていないからこの先も困るはずがない、と言われてしまうと説得の使用がほぼ無い、取り付く島が無い感じになってしまうのですが、この町は大きく盛り返すことができ、図書館も整備されました。

ここは小さな島とはいえ切り立った崖が多いので、集落が点在しているんですね。な



のでここにある図書館だけでなく、島中の人が集まるようなスポットに対して、ミニ図書館をつかってサービスを提供するようにしています。

この島は観光にも力を入れているのですが、最近ではこの図書館自体が一つの観光の目玉になっています。実際私も4月にこの島にイベントのために行ったのですが、島外から図書館関係者30人と隠岐諸島の他の島から30人の60人が集まりました。かなり今図書館というのは観光施設にもなるし、ちょっとした中長期滞在する人にとって仕事をするのに程よいか、行く行くはこの島はまだまだ認識されると思います。

少し飛ばして、次にこの数字を見て頂きたいのですが、例えばさっき挙げた紫波町や海士町の一人当たりの貸出冊数が4冊ぐらいですごく高いわけではないです。大体理想としては、6~7冊、できれば8冊ぐらいと言われています。

しかしいい活動をしている図書館でも、実際にはすごく顕著な数字が出るわけではありません。そういう中で逆に田原市の数字はかなり突出していると言えますね。

あとご紹介がまだでしたので戻りまして、東京都武蔵野市にあります武蔵野プレイス。武蔵野市の場合は17冊ということでかなり驚異的な数字が出ています。

ただ武蔵野市の場合はですね、住民がホワイトカラーと言われるかなりトップクラスの人たちが住んでいるまちなので、まちの在り方が少し違うという感じですね。

名取市の場合、参考になるのがさっき言いました鯖江、あるいは紫波といったところであろうと思います。

つまり、近隣に巨大な有数の大都市を持っていて、その大都市のベッドタウンという側面がある。と同時に、当然完全に飲み込まれているわけではなく、独立自治体としての力を持っている。そういうまちでどういう図書館活動が行われているのかということを見ていくと、名取市が進んで行くべき方向、特に名取市図書館がどうなっていったら良いのかということに対してヒントが得られるのではないかと思います。

特にこの中で特筆すべきは鯖江市ですね。ちなみに鯖江市と名取市と180度違うのは鯖江市にはイオンを始めとする大型スーパーが1店も無いことです。鯖江市は大型商業施設の最大のライバルです。イオンが過去に出店したことがあるのですが、鯖江市に出店すると必ず敗北するというジンクスがこういう世界にあり、もはや誰も出店したがないのですが、鯖江市民は絶対に市内の大型スーパーで買い物をしないです。

なぜかと言えば、そういう買い物は福井市で済まし、日常の買い物は地元の商店を使うから大型スーパーの販売戦略が成立しないのです。

名取市の場合、これはこれで良いモデルでしょうし、むしろ近隣から買い物の来られる方がたくさんいらっしゃるというのは良いことだと思いますが、この点だけが違いま

すね。

ただそれ以外に関していうと、産業構造のあり方、一次産業従事者がいる程度いること、二次産業がある程度存在していること、といったこと含めて非常によく似ているのではないかと思います。

ではこれからさらに図書館がどんな機能を持っていけるか、こういう機能があっても良いのではないか思っていることを一つ二つお話ししようと思います。

図書館は元々そういう施設だと言えるのですが、新図書館は広くなりますので今のどんぐり・アン図書室は良いのですが、私も関わってきたので力及ばず申し訳ない感じですが、やはり残念ながら手狭です。

子ども図書室だと思ったらとても立派です。震災の直後に角田市がこども図書室をつくったのですが、それが相当おしゃれだったんですね。名取の図書館をつくるときにあれぐらいおしゃれな図書室になるといいなあと思って今のどんぐり図書室をつくるのに関わったのですが。

そういう意味では今回広がるわけですが、やはり本をある程度置けるようにするということはすごく大事なことです。現図書館ですと、かなりの本が書庫に入っている状態になっていますのでそれをもう一回表に出すという話なのですが、同時に広がったスペースを活かしてこんなことができるのではないかという話です。

例えば、これは私が横浜で運営している「さくら WORKS」、いわゆるコワーキングスペースと呼ばれているものです。仙台市内には今かなりこういうものが出てきていますが、場所を共有して、同じ場所で働くためのスペースです。

一人ひとりそれぞれ別の会社で別の仕事をしていたりしますが、自分で一つずつ部屋を借りて、新しい会社を始めたり事業を始めたりするのはなかなか大変です。

私も6年くらい前に会社をつくりましたが、一番ビクビクしたのは物件を借りる時ですね。目先の金が無い中で月々5万円の家賃を払うとか怖すぎるわけです。

今全国的に都市部を中心に急速に増えてきているのは、こういうコワーキングスペースです。誰もが自由に使える空間があって、好きな時に座って自分の仕事をする、あるいはそこで出会った人たちと繋がっていっしょに仕事をしていく。

例えば先ほどお見せした雑誌ですが、その雑誌は編集をしている人、デザインをしている人、全部この中で開拓しました。だからその雑誌は、ほぼそのオフィス内だけで制作されているんですね。

そのように、今新しい価値観として、大規模で立派なオフィススペースを設けるよりは、むしろ人との出会いで交流が起こりうるような働く場をつくる方がいいんじゃないか、その方がクリエイティブなんじゃないかと考えられています。

実はこういう機能が図書館にあっても良いのではないかと思います。図書館の中に実はそういうスペースは既にある、調査・研究をするような部屋、いろいろな人がそれぞれの思い思いに勉強したり調べごとをしたりするわけですね。そういう空間を図書館にもっと増やしていく、ということを実験図書館で試みてもよいのではないかと思います。

次に二つ目としてファブラボについてです。これも私が横浜でやっているのですが、最近デジタル時代の新しいものづくり工法というような言われ方をして、雑誌やテレビでもよく特集されています。

一般に 3D プリンターはよく聞いたことがあるかと思います。新しい、プラスチックの射出成型をする仕組みですね。

ここにペットボトルのふたがあります。すいぶん良くなったと思いますが、これを私が 80 歳になった時にきれいに開けられるだろうか、ちょっとコツがいりますね。あるいは力が要りますね。多分シニアの方にとってはとても不便なものではないかと思います。

例えばこれについて、皆さん画期的なヒント、アイデアがあって新しい仕組みを考えた時に、試作品 1 点作るのにとってもお金がかかるわけです。1 点作るだけで数十万円かかります。

ところが、3D プリンターを使うと簡単に作れます。ほとんど材料費しかかかりません。ペットボトルのふた 1 点であれば 100 円以内でできます。

それで 3D プリンターが今世界的に注目されているのは、1 点ものや試作品を作るのに便利だからです。実際 3D プリンターで今一番使われているのは医療分野ですね。人工関節を作るというところで使われています。人の身体に埋め込む人工関節というのは、一人ひとり全部形が違います。全部オーダー、特注品になるので高くなるのです。結果医療費が高くなる。それに対して 3D プリンターだったら、その人の身体の体型に合わせたものをごく簡単に射出成型できるので重要視されているわけです。

例えばそういうものが図書館があれば、二次産業に関わろうとする人にとって自分のアイデアをすぐ形にできる、そして上手くいかなかったら図書館の資料でもう 1 回勉強してみて、もう 1 回やり直してみる、というようなことができるのではないかと思います。

実際アメリカ等ではかなり 3D プリンターを図書館に置く、あるいは 3D プリンターごと図書館から貸し出す、というようなことが増えています。

では最後、今 MOOC という大学の授業をオンラインで配信するという仕組みが世界的に広がってきています。

これがなぜこんなに広がってきたかという背景やストーリーもおもしろいのですが、大学の授業を居ながらにして学べるという仕組みは、インターネットが登場したころ、

かなり前から試みられていました。言ってみれば放送大学のインターンというわけです。

ちなみにアメリカとかでは、オンラインでインターンを受講してその単位を認定するというところまで進んでいます。

そこでMOOCという仕組みにNTTドコモが提供しているgacooというサービスがあるのですが、東北大学の今村先生という防災の専門官がいらっしゃって授業されていますが、こういうものを図書館で受講できるようにするというのはこれからの図書館のあり方ではないかなと思います。

今日いくつかご紹介してきたように、図書館が様々なイベントを仕掛けていくというのはとても良いことなんですけれど、それは手間もかかるわけですね。そういう中で図書館で設備だけ用意しておいて、学びたい人は学べるような機能を提供していく、というのはこれからの図書館の役割ではないかと思います。

最後に一つだけ、これからの名取市図書館の建設はあつという間だと思います。今の工事は着工したらとにかく早いです。見る見るうちにあつという間にできます。着工したらもう後戻りはできません。そして着工した後に、この方が良かったと言っても大概もはや間に合いません。本当はこうしたかったということを実現できるのは全部完成した後でしかないです。

これから大事なことは実際に着工するまで、目安として年内ですね。年内の間に新図書館ではどうしたい、どうあるべきだと考えるのかを協議会でも検討委員会でも意見を出していくことです。ここで言わない限り絶対に取り入れられることはありません。もちろんあとは建った後に何年か経ちながら少しずつ役割やあり方を見直していくという、いわゆるリニューアル、リノベーションすることは可能ですが、とにかく建つまでに関して言いますと今しかチャンスはありません。その他にぜひいろいろなご意見を伺いたいと思うのですが、その時に大切なのが、何となく自分はこういうのが欲しい、いや要らないでは困るんですね。ある程度他の人が納得するというようなものが必要ですね。その時に多分役に立つのが、ライブラリーリテラシーというインセンティブを付けていただくことかと思います。

どういうことかと言うと、自分たちのまちの図書館が良い図書館であるのかどうかを評価するのは結構難しいですね。名取市の図書館しか知らなかったら、例えば名取の今の図書館、木の雰囲気でもとても良いというお声をよく聴きます。でもそこしか見ていないから、名取市の図書館が全般的にみてどれぐらい良い図書館なのかってそれだけでは分からないですよ。

私たちが物事を評価するとき比較して評価します。ですからぜひ他所の図書館を知ってください。他の図書館を見る、使うということをぜひこれからたくさん経験して頂ければありがたいです。

例えばお近くでいえば岩沼市ですよ。岩沼市の図書館はどう使われているのか。

例えば名取市の高校生は明らかに岩沼市の図書館を使っています。それはなぜなら、残念ながら今の状態では高校生が勉強する場として名取市図書館は機能できないからです。これが新図書館になったらガラッと変わると思われれます。どのように使われているか、あるいは使いやすいとかですね。

とにかくを差を知る、違いを知るというものが新しい可能性を引き出します。なので自分たちの町の図書館を使いつつ、他所の町の図書館を訪れて使ってみる。それをどんどんやっていくだけでもうちの町の図書館はこういうところがいいとか、課題があるとかが分かります。

それと同時に、他所の図書館に行くと、こんなこと当たり前なのにこんなこともできていないのかと必ず気付きます。

そのうち他所でやっていて名取にぜひ取り入れたいものをご提案して頂きつつ、他所では当たり前でないけれども名取ではごく当たり前に行われていることに関しては、これはいいことだとぜひ図書館スタッフに言ってあげてください。

おそらく宮城県内、東北地域において図書館として勝っている部分があるとすれば専門職の司書が多く、全般的に若い世代が多いということが挙げられます。

おそらく宮城県内において図書館で雇用されている正規職員のスタッフであれだけ若い人が多い自治体はここしかありません。それはかなり大きな強みです。10年後、20年後というスパンでみたとき、ものすごい大きな名取の財産となります。

ぜひ皆さんからも現場で働いているスタッフに、これいいんじゃない、と思うときはぜひそれを言ってあげてください。彼女たちもそれで大変自身を深めるでしょう。

そういうことで、自分たちのまちの図書館を知りつつ、他のまちの図書館を知って、それらを踏まえた上で我がまちの図書館を提示していく。市民である皆さんご一人ひとり感じて、常にご発言いただけるとすごくいい図書館がこのまちに必ず生まれてくるようになるはずですよ。

思い起こせば私も長いことになりますがここまで関わってきて、また新図書館建設に関わらせて頂いていますので、ぜひいい図書館になるといいなと思いますし、またしたいと思いますし、できればライブラリー・オブ・ザ・イヤーを獲るぐらいの気持ちでいきたいと思っていますので、ぜひ市民の皆さんと一っしょに誇れるものをつくるために、意見を出してアイデアを練っていい図書館に近づけていければと思っています。

少し長くなってしまいましたが、15分くらいありますのでご質問等受けたいと思います。

## ◎柴崎館長

岡本さん、ありがとうございました。ではせっかくですので、岡本さんに質問やこの部分をもう少し詳しくお聞きしたいということがありましたら、どうぞ挙手をお願いします。

ちなみに岡本さんのお勧めの図書館はありますか。

### ◎岡本アドバイザー

震災以降、支援の関係があつて宮城県内の図書館ひと通り回ったのですが、宮城県内で断トツにいいなと思うのは加美の中新田図書館ですね。町立であれだけのものを持っているというのは非常に驚異的だと思います。あとは蔵王の図書館です。小ぶりですけど、一つ一つのサービスが職員により非常によく考えられているなということを感じます。そういう意味では町立レベルの図書館というのはよくできています。町の財政規模で図書館を持つのは結構大変です。それでもなおつくっていて、ちゃんとスタッフが配置されているということはやはり強いですね。

あとは被災地域で大変厳しい状況なので何とも言えないのですが、それでも歴史ある気仙沼図書館ですね。今の建物の前の気仙沼図書館はかつて東洋一の図書館と言われたそうです。ですから、かつてはそういう時代もあつたので、どれだけ町の中で図書館が根ざしているのか知って頂きたいです。気仙沼の場合は水産事業者の方々が毎年気仙沼図書館に寄付してくださるので、水産関係の本がたくさん入っているのですが、まさに根ざした図書館であるということを感じますね。

あと県内ではないですが、近隣ということで一関市ですね。一関は新しい図書館をつくりましたのでそこもいいですし、あとは花泉、検討委員会委員長の早川先生が図書館職員だった時代におつくりになられた川崎村の図書館、といったところでしたら車であれば1日で回れる所ですので、そういうところをぜひ見ていただければと思います。

本当に他所を見ると、勉強になるところもあるし、すごいなと思うところもあります。あちこち見ていただいて、それを協議会や検討委員会で活発な意見交換が行われますと良い刺激となって、市の職員の方も気合が入ってくるかと思います。

### ◎柴崎館長

岡本さんありがとうございました。

長時間にわたりまして検討いただきありがとうございました。岡本さんに拍手をお願いします。

それでは予定ではここで終了する予定でしたが、冒頭で少し触れましたように、内装に関して検討する必要が出て、11月末ぐらいまでに決めていかななくてはならないようです。

まずは間仕切りを決めていきたいと考えています。図面をお配りしておりますが、確

認していただいて、お示ししている案でよろしいかどうかを伺いたいと思います。

基本的に大きな部分は前に見て頂いている図面と変わりはありませんが、一部変更している箇所がありますので、その部分についてご説明させていただきます。

まず2階の平面図ですが、前の図面ですとおはなしのへやがかなり広いスペースでしたので、今回縮小しています。平米数にすると35~40㎡くらいだと思いますが、20組の親子が楽に座れるくらいのスペースがとれていますので、これで確定させて頂きたいと思っています。中の床・入り口の形といったデザインのものや天井の高さにつきましては今後になりますが、面積についてはこの場で決定したいと思います。日常のおはなし会をする分には十分な広さであると私たちは考えています。35㎡というと図書館の南館の半分くらいの広さ程度です。

### ◎板橋委員

入り口を閉め切ることはできますか。

### ◎柴崎館長

そういうことは今後決めていくことになります。もちろん閉め切っておはなし会をしたいと考えていますが、その形といったものの検討は今後になります。

それと、以前多目的室を外し視聴覚資料を置きたいとお話しましたが、委員長と話しをした際に、せっかくカフェをつくるのであればこの部分までカフェの雰囲気が出るようなスペースをつかって、ここでお茶を飲みながらお話をしたり、ここに図書館の本を持ち込んで読書をしたり、というブックカフェ的なスペースにできたら名取市図書館の売りになるのではないかという意見を基に私たちも検討しまして、このような配置にしたいと考えます。

さらに以前カフェのカウンターをエントランスコーナーに持ってくると思っていたのですが、出入り口の場所に近く万が一のことと、中に人を呼び込むという意味を考えて、1回図書館内に入ってから購入できるような配置、向きにしました。

次に3階平面図をご覧ください。ここは吹き抜けを取りました。以前階段の位置が中央にあった時に吹き抜けも同じ位置にあったのですが、前回の検討委員会で階段だけずらしましたが、吹き抜けが残った形となっていました。明かり取りの意味やフロアの圧迫感をなるべく感じないようにするため、吹き抜けがあってもいいのではないかと考えていましたが、それがあることによって3階のスペースが使いにくくなり、またあっても無くても実際にはフロアの圧迫感に影響があまりないのではないかとの意見や、実際にいろいろな施設を見たのですがさほど圧迫感を感じないだろうという考えに至り、3階のフロアをより使いやすくするために思い切って無くそうということで今考えています。

それから情報発信コーナーのところに一部間仕切りを付けました。ここは点線のところが開いている所なのですが、必要に応じて閉められるようにしたいと思います。中でミニ講演会やちょっとした説明会等をする際に、なるべく音が外に漏れないようにしたいと思います。間仕切りとして描かれている実線部分について詳細なデザインはこれから決めていきたいと思っています。

それから7月中旬までに床と壁の仕上げについてもどのようにするか決めていきたいと考えています。私たちが今考えているのは、2階フロアはにぎやかなフロアということでフローリングを主体とし、カフェコーナーと一般図書コーナーといった各コーナーで色分けし違いを出していきたいと考えています。

3階は静かなフロアということで、音を極力抑えるためカーペットを考えています。どんな色にするのかといったことは今後検討していくことになります。

それから壁の仕上げなのですが、クロス張りとかペンキ塗りとかあるようですが、このような施設の場合はペンキ塗りが一般的ということですので、壁仕上げについてはペンキ塗りで進めていきたいと思っています。

特に反対意見等が無いようであれば、このまま進めさせて頂きたいと思いますが、よろしいでしょうか。では、提案のように進めていきますのでよろしくお願いします。

また、スケジュールについては非常にタイトで、7月以降10月まで月1回検討委員会を開催する予定です。7月につきましては16日になりますのでよろしくお願いします。現時点で調整がつかない委員さんもおられるようですが、大変申しわけありませんが開催日を変えませんので、ご理解のほどよろしくお願いします。

それから8月については28日の金曜日で考えています。よろしくお願いします。

それでは以上をもちまして終了します。皆さん大変お疲れ様でした。